# 中等国語科における教師力形成に関する一考察

## ―「人間科学入門」での実践を基に―

岡　　利　道

## 1　研究の意図

筆者は、平成22年度から24年度まで、広島文教女子大学における1年次（2セメスター）配当の全学必修科目「人間科学入門」を担当した。全体テーマは「現代の日本　― 人のありかたと社会との関わり ―」であり、5名の担当者が各論テーマを設定し、三講ずつの授業を行った。

筆者は、初等教育学科の教員の立場からということもあり、「教育の現状を捉え、その未来を考える　― 中学校の国語教室に注目して―」をテーマとし[1)]、以下のような視点を持って臨んだ。

全体テーマ「現代の日本」を、“現代日本の現状を捉え、その未来を考える”と置き換えてみる。もう一歩突っ込んで、“教育の現状を捉え、その未来を考える”とする。その教育は、何もかも取り上げることはできないから、国語科教育とする。それも、中学校の国語科教育であり、それに従事する教師の姿に焦点化する。

そのようにしたのは何故か。「人間科学入門」という科目名からも連想されるように、“人間の姿から学び、問い続ける”ことが大切だと考えるからである。“人間の姿”としたが、その人間とは、受講生よりは年長の教師である。様々な困難とどのように格闘し、乗り越えてきたのか、教師たちの姿から学んでいきたい。

現代の日本は、格差社会だという捉え方がある。好例は、教育格差の存在[2)]。例えば、学歴でもって人物の優劣・評価が決められる。このような教育格差を食い止めるため、義務教育のあり方は取り分け重要だ。特に、中学校の教育現

場で格闘する一人の教師（と、もう一人の教師）を取り上げ、考察を加えつつ、現代の日本の姿を捉え直し、未来を考えていきたい。

本稿では、まず、「２」でこの講義の大体を示し（テキストの内容を縮約し）、そののちに、「３」で本年度（平成24年度）受講生の毎回レポートのうちの最終回（第３回）分を対象とした考察をする。その考察対象は、「講義全体を振り返って意見や感想を述べる」という課題レポート記述である。受講生たちがこれまで出会ったことのないタイプの教師の姿が見られ、様々な思いが記されたことであろう。書かれた内容を分析し、本稿のテーマである「中等国語科における教師力形成」において何が重要なこととなるかを考察したい。

## ２　講義テキストから

### (1) 中学校の教室から日本の教育を捉えてみよう

現役教師であるＫ先生の姿を取り上げる。中学校第１学年における「話すこと・聞くこと」の学習指導を、ＶＴＲも交え、見てもらうことにしたい。中学１年生たちは、特に「聞くこと」が苦手だという。ただ嘆いているばかりではいけない。Ｋ先生は、立ち上がった。どのように格闘していったか。必見！

◎はじめに

Ｋ先生とは、甲斐利恵子先生であり、東京都内の中学校に勤務する現役ベテラン国語教師。彼女曰く、「「言葉」を学ぶことは楽しい。それは、大人も中学生も同じである。「言葉」が話題になると、教室がとたんに明るくなる。「日本語っておもしろい」「日本語についてもっと知りたい」「よし、この言葉を使ってみよう」という中学生の声が聞こえる国語教室づくりをめざす。」と。現在も、実践研究に没頭。何時も初心を忘れず、自己研修・研鑽に努める先生である。

① Ｋ先生の学習指導のねらい

観点を持って聞くことが難しい、という子どもの実態がある。聞く力が十分に育っていない。あるいは、育てられていない。平成時代の、教育の課題の内の一つであろう。聞く力をつけようという授業のねらいで、Ｋ先生の学習指導

は構想された。中学校１年、国語科、「話す・聞く」の単元。

②Ｋ先生の学習指導の実際

1 教師のスピーチ

授業では、まず、Ｋ先生が３分間スピーチをする。あるテーマ（学校の図書室に漫画本を置いていいか）で、結論と根拠を、しっかりと伝える。そのスピーチをもとにした授業が展開される。スピーチは、次のとおりである。

「学校の図書室に漫画本を置いていいか」というお話をします。よおーく聞いておいてくださいね。

まずは、私の知り合いの先生、二人の話からします。

一人は、図書室に漫画本を置いて、「困ったことになった」と話してくれました。図書室の利用者は多くなったのですが、休み時間の終了のチャイムが鳴っても帰らないんです。時間にルーズになるから、図書室に漫画本を置かないのがいいのではないかと言っています。人がたくさん集まるから、図書室がうるさくなるので困るとも話していました。

もう一人は、図書室に漫画本が入って、「とてもいいことがあった」と話してくれました。図書室はみんなが入りやすいところなんだなあと感じてくれて、ふだん図書室を利用しない人までどんどん来るようになったそうです。本の貸し出しの量も増えて、漫画本を置いてよかった、とのことです。

さて、私自身はどうかと言うと、図書室に漫画本を置く必要はないと思います。なぜなら、漫画本は小説よりもよくないと考えるからです。もう一つ言うと、図書室は読書をするところで、漫画本を読むところではないということです。漫画本というのは、自分たちで、好きなものを好きなように読めるのではないでしょうか。

2 教師のスピーチをめぐって

そして、Ｋ先生が発問する。「先生は、どんな結論で、どんな根拠でしたか？」答は、的確なものではない。私たちも、とても長い話を聞かされて、予期せぬことを聞かれ、あたふたとする経験がある。Ｋ先生は、子どもたちが混乱してしまうだろうという予想のもとに、この話を仕組んだ。教材化した。

さらに、「根拠をしっかり捉えて、そこにメスを入れられるようだと、素敵

な聞き手になれると思います。」と呼びかけて、子どもたち自身が、自らの意見と根拠を持ち、それを聞き合う学習に移る。

以下は、授業の記録（抄）である。Ｔは教師、Ｓは生徒を示す。

Ｔ１　置いた方がいいという立場の人から聞きます。結論と根拠を発表してください。

Ｓ１　漫画本を置いた方がいい。図書室は静かというイメージがあって、漫画本を入れたら結構明るくなると思うから。

Ｔ２　「～だから～」と、Ｓ１さんは言いましたか？

Ｓ２　（答える）

Ｔ３　次は、置かない方がいいという立場の人に聞きます。結論と根拠を発表して下さい。

Ｓ３　漫画本を置かない方がいい。小説を読んだり調べたりしているのに、遊び場になってしまうから。

Ｔ４　「～だから～」と、Ｓ３君は言いましたか？

Ｓ４　（答える）〈後略〉

やはり、生徒に聞く力をしっかりつけようと、Ｋ先生は、「“～だから～と、○○さんは言いましたか？」と、何度も問い続ける。その時のＫ先生は、あたかも芯の強い螺子（ネジ）のようであり、生徒にぐいぐい食い込んでいっている。

### 3 Ｋ先生の思い

Ｋ先生は、「聞くことを、観点を持って」という小さな積み重ねをすることの大切さが身にしみて分かってきたと言う。いくらディベートをしても、いい聞き方が身につかなかった。苦労はしたが、この面での教材開発をすることの重要性が分かってきたのだそうである。

こうも言っている。話題を出す場合、気をつけることは、子どもたちの生活実感に根ざしたものであるということ。そして、国語の授業だと言う限りは、言葉や読書に関連した話題にしたい。例えば、目上の人には常に敬語を使うべきかとか、家族で挨拶はいらないかとかである。子どもに体験がないことや、反論の余地がないことや、雰囲気が重くなることだと、話題としてはふさわしくない。雰囲気が重くなるのは、道徳的なことが根拠の全てとなるようなこと

声を出す　声を聞く―根拠を聞く―

一年　組（　　）

〈聞きとりメモ〉

先生は、何を言いたかったか（結論は）

※このメモ欄は自分でわかる字でよい。

根拠は

反対する　NO

賛成する　YES

（根拠）

どちらかに○

〈講評〉

＜　＞さん・君

＜根拠・結論

＜　＞さん・君

＜根拠・結論

＜　＞さん・君

＜根拠・結論

図１　その時間に使用された「学習のてびき」

である。このような時は、根拠を述べるとき、語彙の広がりがなくなる。難しいことだが、子どもの実態や学習歴、根拠を言うときの語彙などを想定して、教材化することが大事だ。

最終的に、次のことが言える。たくさんの情報を受取る。その中から、必要なことを区別して聞く力が重要だ、と。スピーチを聞くことの場合では、「順序・過程（プロセス）」「因果関係（原因と結果）」「事実と意見」「誰々の心情」「話し手の真意」「自分も使ってみたい言葉遣い」など、区別してそれだけを聞き取るという学習過程にするとよい。K先生は、子どもの実態や学習歴のことで付け加えている。日頃、子どもたちが聞き間違いをすること、勘違いをすることば、それらに関して子どもはこれまでどのような学習をしてきているか、などを正確に把握しておくことも大切である、と。

③K先生の学習指導から言えること

K先生の学習指導のように、教師の仕事には、「勢い」がなければならない。その仕事の全時間中、最も多くの時間は、授業に費やされる。ここに、教師が

なすべきことの最重要部分として、学習指導というものが特定できることになる。学習指導に「勢い」がなければ、生徒たちに力をつけられない。

K先生の学習指導によって、生徒たちは身を乗り出すようにして学習していた。生徒にも「勢い」が生まれたのである。もちろん、教科書教材は必要である。しかし、それ以外にも、生徒たちの身近な日常生活に直結した教材の開発というものが、K先生の例のように、生徒の最もそばにいる教師の手によってなされ、実践されることが要請されるのである。特に、この平成時代には。

④K先生の学習指導、そのルーツは

平成時代のこの熱心なK先生。実は、師と仰ぐ先輩教師がいる。K先生の学習指導の「勢い」を生む源。それは、先輩教師であるO先生の薫陶であった。O先生の人間性と、卓越した教育技術に学び、それにあこがれ続けるK先生であった。

### (2) 学ぶことの原点、教育の担い手たちの奮闘ぶりをたどろう

K先生がバイタリティあふれる指導ができるのも、心の支えがあるからである。それは、大先輩であり、今は故人となられたO先生の存在である。K先生は、困難に直面したとき、何時も「O先生だったら、どのように指導されるだろうか？」と考える。すると、不思議とパワーやアイディアがわくという。そのO先生の姿を、VTRも視聴する中で、感じ取ってもらいたい。生徒に国語の“力をつける”、確実に何かを“できるようにする”秘訣が語られるはずである。

◎はじめに

O先生とは大村はま先生であり、本名は「大村 濱（読み同じ）」。国語教育実践者（中学・高校）。1906年6月2日、横浜市に生まれる。1928年、東京女子大学を卒業後、長野県立諏訪高等女学校（現　長野県諏訪二葉高等学校）を皮切りに教鞭をとる。戦後は東京都内の中学校に勤め、新聞・雑誌の記事を使った授業や生徒各人の実力と課題に応じたオーダーメイド式の教育方針「大村単元学習法」を確立した。それに参加した生徒は延べ5000人以上といわれている。半世紀以上の教鞭実績を称え、1963年には広島大学主催「ペスタロッチー

賞」を、1978年には日本教育連合会賞をそれぞれ受賞。また定年退職後も「大村はま 国語教室の会」を結成し、日本の国語科教育の質的向上に尽力した。勲五等瑞宝章を受章し、2005年4月17日、惜しまれながら永眠。鳴門教育大学附属図書館には、「大村はま文庫」として、文献や資料、学習の記録などが収蔵されている。

①学習指導、旧から新へ

学校教育の質的変化に伴って、教師の仕事としての学習指導も変わっていった。

| (旧) | | (新) |
|---|---|---|
| 教師中心の立場 | | 学習者中心の立場 |
| 「教授する」 | → | 「学習指導をする」 |
| 教授細目にもとづき | | 学習指導要領にもとづき |
| 教授案をもって | | 学習指導案をもって |

図2 「教えること」の変容

②学習指導の大元となるものー教育課程（カリキュラム）ー

1 教育課程とは

教育目標を達成するために、教育内容を計画的に組織し配列して、一貫した体系に編成したものである。これがなければ学校が運営できない、と言ってもよい。

2 教育課程編成の歴史

伝統的な「読み・書き・そろばん」或いは「3R's → read write arithmetic」がスタート。次に、言語文化中心の教育課程へ、そして科学中心の教育課程へと進んだ。現代となって、米国にて画期的な「バージニア・プラン」が出され、現実の社会生活における様々な機能や活動をスコープ（学習の領域・範囲）にとり、子どもの興味の広がりをシークエンス（学習の系列・順序）にとって教育課程を編成することがスタンダードとなった。それは、「カリキュラム（教育課程）の現代化運動」と呼ぶにふさわしいことである。そして、今日にいたっている。

3 教育課程の構成原理

大まかに言うならば、①教育の本質的要請、②国家・社会からの要請、③児童生徒の必要・要求・発達からの要請、となるだろう。

4 教育課程に則った教科書の編集、そして…

教育課程に準拠して、教科書が編集される。前の「3 教育課程の構成原理」で言えば、教育の本質的要請を受けたところの、国家・社会からの要請に基づくものということになる。しかし、教科書は、あくまでも大人側のトップダウン方式で編まれている。その内容は、現実世界との接点が薄く、机上の学問に止まる場合もある。教科書を使うことは、“一つの学習”（A型学習とする）であることには変わりないが。

そこで、子ども側からのボトムアップ方式で、教育の本質的要請は変わらないが、児童生徒の必要・要求・発達からの要請をより大切にした、教科書教材とは異なる教材を補い、学習を成立させていく必要がある。そうした教材による学習が機能するならば、学習者は、「学んだことが、生活に生きて働いている」という実感を持つであろう。こちらは、“もう一つの学習”（B型学習とする）ということになる。こちらを開拓したのが、昭和時代のO先生であり、後継者である平成時代のK先生である。

③O先生の学習指導（VTR）

NHK総合テレビ「わくわく授業」より、「教師・大村はま　あなたの言葉で伝えてごらん」を観てもらう。次のような流れである。

1．授業風景　昭和52年　71歳　石川台中学校での研究授業

2．鳴門教育大学附属図書館にある「大村はま文庫」の紹介

3．インタビュー　98歳時

漫画「クリちゃん」を使った授業（昭和51年　石川台中学校）を例に。

問：同じ教材を二度と使わない[a]のですか？

答：前の子たちと比べてしまうから…

授業風景…話し方の勉強をしているという意識ではなく、何時の間にか生き生きと話してしまっている。

問：生き生きと話すとは？

答：心から話したいと思って、そうすること。面白いと思ったら話す。話しなさいと言われて話すのではなく、つい話すようになるのがいい。

4．授業風景

雑誌の裏表紙にある鉛筆の広告を使った学習指導　人形を使った学習指導

『子ども風土記』シリーズを使った学習指導

5．大村先生の話

よい子と、そうでない子の差がないのが理想。できない子が不幸っていうことではなくて、その子でも成長し、自分でいいと思っているのでいいのだから。「優劣の彼方」だ。そこへ持っていきたい。「てびきする」ことがいる。私は、人を教えることが好きだったのよ。

6．解説

教えるとは、「てびきする」こと。手を引き、導くこと。「学習のてびき」の例。

7．大村先生の話

学習全体を価値あるものにするためには、先生がいる。いなかったら、学習が狭くなってしまう。作文だったら、どう書いていいか分からない子がいる。書き出しを、ちょっと書いてあげる。そんなふうにしたら、「個性が失われる」って言う人がいるけど、そんなことはない。

図３　「わくわく授業」の概要

昭和時代を代表する、画期的な「大村　単元学習」の一端を観てもらった。そこには、自信と信念が満ち溢れていたと思う。時はまさに「高度経済成長時代」であった。それより前の時代の、先に触れたところの、A型学習に限界を感じたO先生。そして、B型学習を創造し、推進していった。O先生の「勢い」は、生徒たちも巻き込んでいった。生徒たちもまた「勢い」溢れる学習を展開したのである。

熟達した教師であるO先生は、B型学習で、A型学習をも包み込んで余りある実践ができる人である。K先生も、そうである。しかし、それは誰にでもできることではない。一般の教師は、手堅くA型学習をさせ、余裕があればB型学習を部分的に取り入れる。あるいは、B型学習を包み込んだA型学習を展開

する。

### (3) これからの日本の教育の課題、そしてその解決の方向を探ろう

K先生が理想とするO先生の人物像を、さらに掘り下げていくことにする。生徒一人一人をよく見て捉え、的確に指導することは重要だが、一朝一夕にできることではない。それは、現代日本の「教育の課題」の一つであると言ってもよい。解決するために、人間として忍耐強く努力するだけではなく、職業人として教育技術を確立し、根気強く実践していかねばならない。さらに細かく捉えていくと、…。O先生の言葉や姿から、具体的につかんでもらうことになるだろう。

◎はじめに

(1) の「全体テーマとの関連について」のところで、「現代の日本は、格差社会だという捉え方がある。好例は、教育格差の存在。例えば、学歴でもって人物の優劣・評価が決められる。このような教育格差を食い止めるため、義務教育のあり方は取り分け重要だ。特に、中学校の教育現場で格闘する一人の教師（と、もう一人の教師）を取り上げ、考察を加えつつ、現代の日本の姿を捉え直し、未来を考えていきたい。」とした。いよいよ、ここのところを考察する機会が来た。

最終回にあたり、教育格差があるとすれば、具体的には、何に、どのようにあらわれているのか、また、そうだとすれば、どうやって解決していけばいいのか、ということにも迫っていきたい。

①「教師でありつづける」

ここで視聴してもらうＶＴＲ「教師でありつづける」は、ＮＨＫビデオ「大村はまの世界」第三巻に収められているものである。昭和57年にＮＨＫで放映された「訪問インタビュー　国語教師・大村はま」の最終回である。次は、その「要旨」である。

「ことば」をどう見るか。生活の中に生きて働いていることばを材料として、国語の授業をする。ことばを沢山持っている人は豊かな人だ。

指導の「工夫」ということについて。子どもが生き生きと国語の学習をして

いない姿を見るのは耐えられない。そうならないようにと願って、自分なりに準備して指導してきた。それを見た人が、「工夫している」と言う。私は、工夫したというつもりはない。

「楽しさ」。満足していない、成長していないと思ったら、子どもは楽しくないだろう。伸びている、成長していると思ったときに、楽しいと感じるはずだ。いい授業をするためには、子どもが見えている、子どもをつかまえられていることが条件となる。子どもに喜ばれる材料と、喜ばれる方法を求めていく努力が要る。

子どもが「かわいい」と思ったことはない。私の指導を見て、子どもを愛していると言われた人もある。が、私は、その子を本気で伸ばしたい一心であった。

↓

「教える」とは。「話す」ことの指導の場合。子どもを捉える（つかまえる）ためには、ただ普通に質問していてはいけない。教師が沢山話す。楽しくする。そうすれば、話したい気持ちや雰囲気ができる。口がぱぁーっと開いて、こちらの質問に答えているという意識のない話が出てくる。そこが、子どもの本音を捉えることだ。子どもから「一」のことを聞くには、教師は「十」を話す。（岡注：子どもと本気で「つき合う」ということだ。）

「教師」とは（教師聖職観について）。自分が成長していなければだめだ。前進していなければだめだ。「あり合わせの力で授業しない[h]」ことが、成長しているということ。学校は、恐ろしいところだ。何の新しい工夫がなくても済んでしまう。私は、自分が自分を鋭く律することができなければ勤まらないところが学校だと思う。自分を厳しく律することができたときに、それを見た人が尊敬して、その仕事を聖職と言うのだ。

↓

「大村流教育は、大村はま先生だからできたんだ」という声（批判）に対して。自分が言えるのは、次のこと。「あり合わせの力で授業しない」。そこから一切のことが始まる。新鮮ということも、子どもをかわいがるということも、そこにある。子どもが本当によく伸びるようにしてあげることが、愛情の表現。親

とは違うのが教師。子どもを前進させ、学力を育てることができるのが教師。ただいい人で、愛情深く扱うことができるのだったら、他の人でもできる。熱意や、誠心誠意だと言うだけではいけないのだ。

図４　「教師でありつづける」の要旨

②教師の仕事

教師の仕事

G　＊　S

↑

K

G（学習指導）…一定の文化を内容を媒介として、児童生徒の知的発達の側面から人間形成を図ること。

S（生徒指導）…教師が児童生徒の人格に直接働きかけることによって、児童生徒の人格発達を図ること。

K（学級経営）… G（学習指導）とS（生徒指導）の二つが十分に機能するように、学級における様々な条件を整備すること。

図５　教師の仕事とは

とりわけ、学習指導とは、上記のことにあわせ、「児童生徒に、言語、科学、技術、芸術等の文化財を教材として学習させ、そこから知識、技能、価値等を身につけさせ、人間としてのさまざまな能力を高めていくこと」である。

まず、教授・学習方法理論研究の立場から整理すると、次の三種類が重要である。

ア　より質の高い文化内容をカリキュラムとして組織し、その教育内容をより確実により能率よく教えるにはどうすればよいか、という問題意識のもとに展開される教授・学習方法

…「系統学習」「プログラム学習」「有意味受容学習」など。

イ　子どもたちの主体的な問題追求を軸とし探求的な学習方法の構築をめざすもの

…「問題解決学習」「プロジェクト法」「発見学習」など。

ウ　子どもたちの個性、適性、能力差に応じた最適の教授方法を追求するもの

…「完全習得学習」「ＡＴＩ（適性処遇交互作用）」など。

次に、学習指導の形態では、Ⅰ「一斉指導」、Ⅱ「グループ（小集団）指導」、Ⅲ「個別指導」の三つが基本となる。

さらに、学習の成立のためには、「学習のレディネス」が必要条件となる。「学習のレディネス」とは、学習者があることを学習するとき、これを習得するのに必要な条件が準備されている状態をいう。その構成要因には、身体的要因、知的要因、情緒的・社会的要因、教育的・経験的要因などがある。

最後に、学習の成立から継続のためには、「動機づけ」が重要となる。「動機づけ」は、「学習過程で起こりうる事態へ、児童生徒を導入し、彼らの活力を高め、覚醒水準を上げ、知的・情動的に敏捷にし、その事態の一部としての学習対象に注意を向けさせ続けさせるための工夫」である。そしてこの「動機づけ」の方法としては、一つに外発的動機づけ、もう一つに内発的動機づけが挙げられる。

**③Ｏ先生の学習指導から見えてくるもの～その一～**

Ｏ先生の学習指導は、次のような特質を持つ。

図５に即して言うならば、確固としたＧ（学習指導）を持ちつつ、Ｓ（生徒指導）とＫ（学級経営）が程よく機能している。下図のようになる。

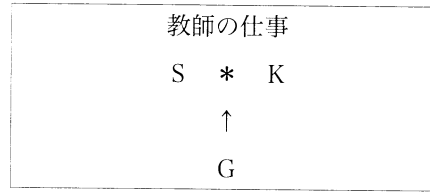


**図６　教師の仕事～Ｏ先生の場合～**

Ｇを推進する中で、ＳやＫが連動してより強くなっていく形だ。さらに、「②教師の仕事」の文章部分に関連させるならば、Ｏ先生の学習指導は、次のような特質も持つ。「学習のレディネス」や「動機づけ」を醸成しつつ、特に、イ（中でも「問題解決学習」）を効果的に組み込み、授業中はⅢ「個別指導」の形態を取ることが多い。非常に、理に適っている。

**④ Ｏ先生の学習指導から見えてくるもの～その二～**

Ｏ先生を、「名人だ」「達人だ」とまつりあげ、「私には到底できませんから」

と言って逃げてはならない。後ずさりすることになる。K先生がそうしたように、一歩でも二歩でも前に進んでいくことが大切であろう。O先生が強調したところの「あり合わせの力で授業しない」ことである。

視点を変えよう。教育格差を生まないようにするために、教師は、どのようにすべきか。少なくとも、教師一人ひとりが、「あり合わせの力で授業しない」ようにと、日々精進することである。本気で子どもと向き合うことである。

日本においては、昭和時代でも、平成時代でも、学校で勉強する目的が、いい上級学校に入るため、さらには給与の高い就職先を得るため、といった面に傾いている。油断していると、未来も、そうなりかねない。受験競争なるものが、ここかしこで生まれ、体裁や外見のよさを求めて、子どもたちが躍起になる。それと同じような価値観を持つ大人が、社会が、そのような子どもにさせているのである。これでは、塾の講師の方が、学校の教師よりも重宝されかねなくなる。

O先生は、「優劣の彼方に」あるものを重視した。上記のことの逆である。子どもたちの知的好奇心を充足させようとした。子どもたちが、よりよい社会を創ろうとする人間（市民）となることを期待して、基礎となる「教科の力」（ここでは国語力）をつけようとした。学校という、競争ではなく、共創（共に創るという意味の、教育評論家・尾木直樹が作った語）する場で、やりがいのある学習を、存分に経験させようとした。その考えは、誰しも否定しないはずだ。教師たちが、大いに個性を発揮し、教育本来の目的を達成するために、生き生きと仕事をしていくこと。それが、理想であろう。

## 3　受講者のレポート記述からの考察

### (1) 考察の観点

望月（2007）によれば、本稿のテーマにもある「教師力形成」に関する研究は、あまり進んでいるとは言えず、同氏の開発による教師力量形成モデル[3)]の創出が手がかりになると考える。望月は、金子（2002）において主張された「教育課程力」の中核に位置する「年間計画」を作成する力に注目し、作成上の留

意点の一つである「学習者の実態に合った教材を積極的に開発すること」[4]が、教師の力量を判断するポイントだとしている。

本稿では、その「学習者の実態に合った教材を積極的に開発すること」に着目するものである。「教師力形成」の重要な視点の一つである。大村が取り組んできたことはまさにこれであり、学生としても大いに耳を傾けるところであると考える[5]。

「2　講義テキストから」の「(2) 学ぶことの原点、教育の担い手たちの奮闘ぶりをたどろう」にある傍線部aの「同じ教材を二度と使わない」という考え方(以下キーフレーズaと呼ぶ)。「教師力形成」の重要な視点の一つである「学習者の実態に合った教材を積極的に開発すること」は、直接的にはキーフレーズaという考え方だと見ることができる。受講生たちがこれをどのように受け止めたかを調べたい。

同様に「(3) これからの日本の教育の課題、そしてその解決の方向を探ろう」にある傍線部bの「あり合わせの力で授業しない」という考え方(以下キーフレーズbと呼ぶ)。それは、先のキーフレーズaについで、「学習者の実態に合った教材を積極的に開発すること」に近い考え方である。

まずは、何名の学生がキーフレーズaについて触れているか調べ、その実数を挙げる。補助的に、キーフレーズbについても、同様な作業をする。ついで、考察として、受講生たちが、キーフレーズa・bに関してどのように評価をしているかをまとめる。

### (2) 受講生の受け止め方

レポート提出を確認できた312名分のものが、ここでの対象となる。次の表1のように整理することができた[6]。

| 項　　目 | 人　数 |
|---|---|
| A「同じ教材を二度と使わない」という考え方（キーフレーズa）を支持する意見 | 小計 31 |

| | | |
|---|---|---|
| 学習者のことについての意見 | 前のクラス・学習者と比べられることがなく、安心して、自信を持って学習できる | 6 |
| | 一人一人が責任感を持って授業に参加し、より質の高い学習に取り組んでいく | 5 |
| | 学習者の興味や意欲が大切にされている | 3 |
| | 学習者も年々変わっていくから必要である | 1 |
| 指導者のことについての意見 | 指導者自身よりも学習者のことを第一に考えている | 2 |
| | 指導のマンネリ化を防止できる | 2 |
| | 指導者の創造性・オリジナリティが伸びる | 2 |
| | 指導者の探究心や陰の努力は素晴らしい | 2 |
| | 学習者に伝えたいことがたくさんあるからである | 1 |
| | 指導技能を向上させることにつながる | 1 |
| 受講生自身のことについての意見 | 自分もそうなりたい、そうなれるように力をつけたい | 5 |
| | 恩師の一人にそのような方がいた | 1 |
| A'「あり合わせの力で授業しない」という考え方（キーフレーズb）を支持する意見 | | 小計 47 |
| 学習者のことについての意見 | そうなれば学習者が楽しく生き生きとし、力がついていると感じる学習となる | 5 |
| | そうしなければ学習者がつまらない（記憶に残らない）と感じる学習となる | 5 |
| | その姿勢を学習者も真似するだろう | 3 |
| 指導者のことについての意見 | そうでなければ教師としての仕事をしたことにならない、その責任もある | 8 |
| | 指導技能を向上させることにつながる（その姿勢を持つべきである） | 4 |
| | 教師自らが限界を作らず、精進（努力）すべきである | 4 |
| | それが大村先生の原点だということが良くわかる | 3 |
| 受講生自身のことについての意見 | 自分も将来そう（いう姿勢で）ありたい | 6 |
| | 恩師もそのように努力していた | 1 |
| 広い視野で捉えている意見 | 多くの教師がそうすれば教師格差が防げ、学校や社会も良い方向に向かう | 5 |
| | その姿勢が大切であることは、どの職業でも言える | 3 |

表1　レポート記述の状況

(3) 考察

レポート提出者が、全体で312名あったが、表1のAに関しては小計31名、A'に関しては小計47名で、合わせても78名と、そう多くはなかった。これは、第三講が「これからの日本の教育の課題、そしてその解決の方向を探ろう」というテーマであり、内容としても、教育格差・教師格差の問題や、大村先生は生徒を可愛いと思ったことはないということ、生徒に一のことを話させるためには教師が十のことを話さなければならないということなどをめぐって活発に意見が出されており、それに押されたことが理由となるだろう。

しかしながら、第二講で学んだ大村先生の「同じ教材を二度と使わない」という考え方を思い出して書いている受講生が約10%おり（第二講ではかなり多くの受講生がそれに触れていたこと、1週間のタイムラグがあることを差し引いても)、また、それと軌を一にする「あり合わせの力で授業しない」という考え方に反応している受講生が約15%はいたのである。さらに、全員と言っていいほどの受講生が、大村先生の教育観について感心したこと・感銘を受けたこと・それを通して深く考えさせられたこと等を書いていることからも、教師力量形成における「学習者の実態に合った教材を積極的に開発すること」の重要性が受講生によって支持されていると判断できると考える。

細かく見ていくと、Aについては、指導者の独創性が生かされ、良い教育をめざすという使命感を持って教材開発がされていき、それが学習者に届く中で、一人一役制（分担制）の責任が良い緊張感となり、学習者が意欲的な学習に導かれているというメリットがあることがわかる。ここで注意したいことは、表には出なかったが、中には慎重論もあり、「一度きりの学習が全てよいとは言い切れない（良い教材は繰り返し使うべきだ)」と12名が書き、「いいことだが準備は大変だ」と2名が記しているという事実である。批判的に見つめ、現実を踏まえながらよく考えた意見が出されていた。こうした受講生の意見から、次の二つのことが示唆されると見たい。一つは、教師にとっていわゆる教科書教材の指導が基本となり、二度三度と指導のチャンスが訪れるそれも生かさねばならないということである。反省・省察の中で、指導方法の改善をしつつ、教師力形成も図られることを忘れてはならない。もう一つは、教師力の形成に

は、採用されてから退職するまでのライフコースとしての大局観が必要であり、経験を積むうちにだんだん教材開発の力がついていくことを見越し、年齢段階毎の、身の丈に合った堅実な授業運営が重要であるということである。そうして、独創性も徐々に発揮されるものと考える。

また、A'については、指導者として常に指導方法の工夫・改善を図るべきことは当然の責務であり、それが遂行されればされるほど、学習者にとっては学習上の利益・幸せがもたらされると言えるだろう。受講生たちは、教師にはフレッシュな感覚とたゆまぬ向上心が不可欠であり、それが学習者を、ひいては学校を善くしていき、さらには教育・教師格差是正の一助になるかもしれない、と考えているのである（表1の「広い視野で捉えている意見」も含めて）。受講生の中には、自己の心・精神を律し、その都度最善を尽くす指導者であれ、人生を歩む者であれ、との願いを持っている人が確かにいると受け止めた。わずかながら、これも表中には出なかったが、2名ばかり、「あり合わせの力で授業しない」ことは「一般的な教師に当てはめてみると、できるとは言い切れない」と記していた。外からの要請による研修と、内から求めていく研修とがマッチし、教師一人一人の力量アップが図られるよう望むが、それはまた課題として残されているとも言えるだろう。

以上、できる限りの考察をしてきた。望月が注視した部分について、別な角度から捉えて肉付けし、補足・留意事項を加えられたと考える。「中等国語科における教師力形成」において何が重要なこととなるか。一通りの見解は示した筆者であるが、望月に比べれば道半ばである。さらにきめ細かなデータを収集し、継続研究に努めたい。

注

1) 筆者以外の担当者と各論テーマは次のとおりであった。
小早川久美子（心理学科）「心の成長と自己理解」／鈴木秀規（人間栄養学科）「生命とは何か—生物学的生命観について考える—」／小西弘信（グローバルコミュニケーション学科）「現代の大衆文化－「若者文化」の担い手として—」／溝渕淳（人間福祉学科）「日本における『たすけあい』のかたちを考える」

2) 元中学校の国語教師で教育評論家・法政大学教授である尾木直樹の主張が有名であろう。

3)　望月（2006）において教師力量モデルのための観点を挙げ、望月（2007）でも同じ立場を取っている。それは、「(教授・学習材）分析力」・「(年間計画／単元）構成力」・「集団（統率）力・教室対応力」・「(学校）組織（対応）力」・「臨床力（カウンセリングマインド)」・「展望力（個体史・歴史・国際)」である。

4)　金子（2002）では、年間計画作成の留意点として、他にも、「学習指導要領「第１章総則」に示された趣旨を踏まえること」・「国語科の目標や内容などの構造を理解すること」・「関連・総合・調和的な学習活動を組織して効果的に指導すること」・「言語活動例と指導時数の目安について配慮すること」の四点が示されている。それらは、いずれも「学習指導要領」(同解説を含む）に忠実であることを求める内容である。

5)　同論文でも、「新教材を開発することは、学習者のためにだけではなく、教師自身の蘇りの点からも有効だ」「良く知られている大村はまの「同じ教材を二度使わない。」という主張は、教師の心を新鮮に保つために肝要なことは何かの事情を語り尽くして余すところがない」と、高く評価されている。

6)　例えば、A受講生の場合、「「二度と同じ教材を使わないのは前の生徒と比べないため。」だと聞いたときはとても感動しました。自分も経験したことがありますが、比べられてマイナスなことを言われると、自信をなくし、やる気をなくしてしまいます。」(前・後略）と書いており、表１中では、「キーフレーズａ」で「学習者のことについての意見」の「前のクラス・学習者と比べられることがなく、安心して、自信を持って学習できる」にカウントしている。

## 参考文献


広島文教女子大学教養教育部（編）. 2012.『人間科学入門テキスト』.

金子　守. 2002.「年間計画・指導計画の立案」. 全国大学国語教育学会（編）『新訂　中学校・高等学校国語科教育研究』. 学芸図書.

望月善次. 2006.「教師力量モデルと大学教育との距離～国語科教師教育研究整理の一環として～」.「日本教師教育学会年報」第 15 号 p.25.

望月善次. 2007.「国語科教育学から見た「教育課程力」形成の留意点～論者の大学教師体験を交差させながら～」.「岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要」第 6 号 pp.2-3.

尾木直樹. 2006.『教師格差―ダメ教師はなぜ増えるのか』. 角川 ONE テーマ 21 [新書]. 角川書店



(本学教授)